

フジタ心理研究所では、

「子供のための本当の教育とは何か」

というテーマを常に考えています。

情報が乱れ飛んでいる現代において、捕らえなければならない本当の情報とは何か、そして、子供たちに与えなければいけない情報とは何かを考え、常に子供の目線で物事を考え、的確な情報を精査しています。そして、伝えています。

こんな時代だからこそ、大切に子供たちの将来を考えたいと思います。

そして、下記のような教材・テストを中心として、市販されていない教材、本当に子供たちのために作られた教材を開発・提供することで、学習環境もしっかりと考えていきたいと思えます。

テキスト(対応学年)

◇文章作成教材

〈1〉 思考・表現カワーク

基本的な文章の書き方を練習します。

一般的には小学4年生から小学校6年生まで使用します。

(中には年長さんから使用している方もいます。)

〈2〉 作文カワーク

自分で文章を書くことの面白さを練習します。

小学4年生から中学校3年生まで使用します。

〈3〉 文章カワーク1

しっかりした文章の書き方を練習します

小学5年生から高校2年生まで使用します。

〈4〉 文章カワーク2

人の書いた文章からも学んでいきます

小学6年生から高校3年生まで使用します。

〈5〉 完成ワーク

あらゆる角度から文章の書き方を練習します。

小学6年生から社会人の方まで幅広く使用しています。

大学推薦入試、昇級試験、一般的な文書の書き方を練習します。

◇一般教養問題テキスト

〈1〉 一般教養・記述テキスト

(標準編) VOL 1～6

身近なことや生活の中にあるもの、また知っていなければならないことをテーマとした総合的な問題集です。

小学校の4年生から6年生、中学1年生まで使用します。

〈2〉 一般教養・記述テキスト

(上級編) 第1集～第9集

日常的なことを多角的にとらえる総合的な問題集です。

ごく当たり前のことでも良く考えてみると「どうしてなのか」ということがあります。

このような疑問を徹底的に理解することを、目的としています。

小学校の6年生から社会人の方まで幅広く利用されています。

◇一般教養・記述テスト

〈1〉 基礎編

小学校の4年生から中学1年生まで、一般教養の基本知識として活用されています。

問題形式は、全て記述問題になります。

〈2〉 標準編

小学生高学年・中学生のためのテストです。社会常識や現在起こっていることがテーマの問題です。もちろん全て記述問題になります。

〈3〉 一般教養・記述テスト

中学生の上級者、高校生、大学、社会人の方のためのテストです。身近な幅広い範囲から出題されています。生きていくうえで必要とされる一般教養の全て記述によるテストになります。大学推薦入試、昇級試験、一般的な文書の書き方をテストします。

小論文、受験作文の書き方

小論文や受験における文章を書くためには、相手の要求がどこにあるのかを知る必要があります。世間を騒がしているような気軽な小説家気取りの文章で、小論文や受験作文を書くことはできません。

「相手を知る」ということは、小論文の出題者や受験作文の出題者が、文章を通してどのような人材を望んでいるのかを知ることです。ですから、むやみに文章を書いてもダメだということです。

今回 kip 学伸で高知大学の医学部に合格をした K 君も同様です。入塾当初は、ごく普通の高校生でした。この状態でどこまでできるようになるのかと、心配をしていましたが、彼の普段からの潜在能力が高く、指導する側の言うことに、ことごとく耳を傾けてくれました。そして、どのような文章を書くことが要求されているのか、どのような人材が必要とされているのかを、指導する側が徹底的に調べ、その延長線上で彼は文章を書いてきました。その厳しい指導に K 君は見事に答えてくれました。

このように、小論文や受験作文は、見えない出題者のことを考えて書く能力を養わなければ合格はありません。自己中心的な小論文、受験作文はダメなのです。どんなに文章を書く力があっても、相手を知らずして合格できるわけがないのです。

しかし、ここまで来るためには地道な普段の努力があつてのことです。文章は、今日、明日のうちに書けるようになるわけではありません。文章を書く基本的なことは、日々の努力でしかありません。普段から「ら抜き言葉」のように間違っただ文法で話しては、きちんとした文章が書けるはずがありません。大切なことは、普段の生活の中にあるのです。

相手のことを考えて文章を書くことができる力は、人生を大きく左右します。本当の文章を書く事は、自己中心的な文章ではなく、相手を思いやる文章なのです。是非、人を思いやることのできる文章を身に付けてください。あなたの人生を大きく変えてくれます。

フジタ式《成功シラバス》高校生用

学校の教科書は、その道に優れた先生によって制作されているため、これに勝る教材はないと考え、他の教材はあくまでも教科書の補助として使用する。

以下で使用している記号

- R. 現段階での学力が下記ランクに属していないが、意志あるものには道は開けると考えられる生徒カリキュラム（しかし、フジタ式シラバスの原理原則を行うことが始めとするため記載はない。）
- A. GMARCH を第1希望と考える生徒カリキュラム
- B. 早慶上智 ICU を第1希望と考える生徒カリキュラム
- C. 東大をはじめとする日本を代表する大学・学部を第1希望と考える生徒カリキュラム
- D. 国立・私立の医学部を第1希望と考える生徒カリキュラム
（基本的にDランクについては、生徒本人の特性があるため個別にしか対応できないので、記述をしていない。とは言っても、Cまでの項目が早い段階でできていない生徒にDランクの勉強ができるはずがない。）

《主環教科》メインとする教科

〔英語〕教科書の全訳は全過程における必須条件である

高校1年生

- A. 入学前にエッセンスⅠの前半を終えておく。そして、夏期講習会で1年生のすべての単元を終了する。なお、学校の教科書の全訳を前提として行うこと。
- B. Aを行いながら冬期講習会あたりからセンター試験の過去問題の全訳に取り掛かる。3年分を目標に行う。
- C. A、Bの項目を早い段階で行う。Bのセンター試験の問題を夏期講習会で行う。二学期に入った段階でエッセンスⅡに入り、2年生の教科書を手に入れ先取りを行う。（全訳）

高校2年生

- A. 学年末が終了した段階からエッセンスⅡの予習に入る。次年度の教科書をもらってあればL3までの全訳を新学期までに終えておく。そして、順次、教科書の全訳を進めながら、夏期講習会で2年生のすべての単元を終了する。なお、学校の教科書の全訳を前提として行うこと。3学期に入った段階で英文解釈の問題集に入る。
- B. Aに並行して夏期講習会ではセンター試験の過去問題の全訳に取り掛かる。5から7年分を目標に行う。学校の定期試験において、センター試験の過去問題が出題されることが多いので対策を兼ねて行う。3学期に入った段階で英文解釈の問題集に入る。
- C. A、Bの項目を早い段階で行う。Bのセンター試験の問題を夏期講習会で完璧に終わらせる。二学期に入った段階で英文解釈に入り、3年生の教科書を手に入れ先取りを行う。（全訳）

高校3年生

- A. 英文解釈の問題集を1学期にうちに終わらせ、大学の過去問題に入る。推薦を考えて早い時期からの対応を考える。
- B. 5月までには、教科書の全訳、すべての問題集を終わらせ、大学の過去問題を5校から7校を目標にこなしていく。
- C. Bの内容に併せて、2次試験の問題の対策として、あらゆる方向のテーマ、問題に対応できるよう対策を考えてゆく。

なお、単語の練習としてNEXT STAGEを各学年で使用する。この教材は、単語を単語として覚えるのではなく、上位大学に対応できるよう早い時期から「単語は覚えるものではなく考えるものである」ことを意識させるためである。

〔国語〕教科書の全項目にわたっての「まとめ」を前提とする。ただし、プリント等が配布されている場合は、教科書と同等の処理を行う。

高校1年生

- A. まず、教科書にある作品を段落に分けることから始め、一つ一つの作品をまとめることを進める。学校の授業でやるかやらないかが問題ではなく、自分の読解力を高めるために行うことを意識してもらいたい。並行して、文章カワーク1を進め、記述力を高める。
- B. C、Aの行うことを2学期までには全て終了させ、新演習 国語に取り掛かる。文章カワーク2に入る。2年生の教科が手に入るようであれば、まとめの作業をコツコツと行っていくこと。

高校2年生

- A. 教科書のまとめを行うことはもちろん、併せて、夏期講習会からセンター試験の問題に取り掛かる。
- B. Aに併せて、文章カワーク2を終わらせること。
- C. A、Bに併せて、個別メニューに入る。

高校3年生

- A. 3年生の国語の教科書は、多くの大学で取り上げられている問題に酷似しているので、しっかりとまとめの作業を行う。併せて完成ワークを早い時期に終わらせる。
- B. Aに併せて、古典の対策に入る。ただし、配点の低い大学を希望の場合、時間をかけないように現代文を中心に行う。センター対策の古典は、過去問題を10年分行うことで傾向と対策を考えていく。
- C. 2次試験対策も併せ、本人の国語力を極限まで研ぎ澄ますことができるよう徹底した個別メニューで対策をする。

なお、個別メニューとは、本人の弱点を考えた問題をその場で作成し、指示、解答を求めるやり方である。フジタ式教育法の最も特徴ある指導法である。

〔数学〕教科書の設問を解くことが必須の条件である

高校1年生

- A. 高校入学までの1学期までに学習が予想される場所までの先取りを、教科書を使って行う。教科書にある問題を一つ一つ解いていく。
- B. 入学までに1学年分を一通り終わらせるようにする。特に、チャートを配布された高校では、チャートをメインとして先取りを行う。
- C. Bに併せて、夏期講習会ではセンター試験の問題に取り掛かるようにする

高校2年生

- A. 1学期のうちにできるだけ先取りを進めアドヴァンテージを広げておく。
- B. Aに併せて、大学の進路を確定しⅠ・A、Ⅱ・Bの学習範囲を決定するために1学期のうちに先取りを完成させておく。また、チャートを使用している学校はチャートを攻略するにはかなりの時間を要することを念頭に早い時期からの心構えが必要となる。
- C. Bに併せて教科のバランスを考えながら、センター試験問題の征服にかかる。

高校3年生

文系 各個人への個別指示となるが、2次試験を考えて、点数配分を考えながら進める。

理系 何しろ時間との勝負になるため、片時も数学から目を離してはいけないことは当然であるが、文系科目への配慮にも最大の注意が必要となる。

私大を含めて、国立2次試験の過去問題を夏期講習会前後から始めるようにする。

《外環教科》主環教科ができていることが前提となり、勉強の時間配分が重要となる教科

〔理科・社会〕

いずれの教科も「新演習」を使って行う。センター対策としての科目であれば、過去問題と併せて行うことで他の教科への負担減を考える。

また、私大を含め、2次試験に必要な教科であれば、国語の位置に理科が、数学の位置に社会が入り、やはり先取り学習をすることで、学校での授業をよりわかりやすくすることを目的とする。詳細については、個々に対応せざるを得ないため記述は割愛する。

【注】このカリキュラムは、部活動への参加を否定するものではなく、実際には、全国レベルの大会に出場するような部活動に所属している生徒でもこなし、大願を成就させている。決して無理なカリキュラムではない。問題は、本人が「やるかやらないか、出来るのかできないのか」であって、まさに本人次第であるということは、フジタの過去の指導経験からもわかっていることである。

フジタ式《成功シラバス》中学生用

学校の教科書は、その道に優れた先生によって制作されているため、これに勝る教材はないと考え、他の教材はあくまでも教科書の補助として使用する。

《主環教科》メインとする教科

〔英語〕

中学1年生・中学2年生

この段階では、能力レベルに差がないので、教科書の全訳を前提として行き、「新演習」で文法の先取りを行う。しかし、英語に特化している中学、特にプログレスを使用している中学においては、その学年の夏までにすべての先取りを行うことが望ましい。さらに、時間を持てる生徒に対しては、NEXT STAGE を渡し発展的な勉強に取り組むことで、絶大なる進化を見ることが出来る。

C・D このランクをあらかじめ考えて学習をしている生徒にとっては、今までの指示は甘すぎるため、中学2年生に夏期講習会終了時まで、中学3年生内容を全て終了しエッセンスⅠに入ること。

中学3年生

私立中学3年生は、エッセンスⅠを早い時期に渡し、予習をさせていかないと学校のカリキュラムの方が早くなるので注意が必要である。公立中学3年生には、受験があるため受験に合わせて指導することが望まれる。しかし、受験問題が年々難化しているために文科省枠で勉強をしていても成績が伸びないことは歴然。そのためにはやはり高校内容の早期着手が望まれる。

C・D 中学3年生の夏期講習会では、センター試験の過去問題を使用し、一般英文の訳し方を学ぶ。(学校の授業で扱う英文では大学受験に対応していないため)

この学習方法によって、学校の成績は確実に「5」もしくは上位の成績をキープできる。

〔数学〕

何しろ教科書在先取りすることが必要である。その学年の先取りを全て夏期講習会までに終わらせるようにする。また、教科書だけでは問題が少ないところもあるので「新演習」を使って問題数をキープする。この学年は問題量＝成績であることは肝に銘じておくこと。

C・D 中学1年生内容は、入学する4月までにその学年の予習を終えていること。また中学2年生内容は、中学1年生の夏期講習会までにその全てを終了していること。そして、中学3年生内容は、中学2年生の夏期講習会までに終了させ、中学3年生になる段階で数学Ⅰ・Aに入る。テキストはエッセンス数学Ⅰ・Aを用いる。

この学習方法によって、学校の成績は確実に「5」もしくは上位の成績をキープできる。

〔国語〕

各学年とも教科書のまとめをメインとして行う。併せてワークシリーズの「文章力ワーク1、2」「完成ワーク」によって記述に対する適応能力を養うことが肝要である。

国語は、問題を解くのではなく、問題を考えることが大切である。

中学3年生に至っては、早い時期からのセンター試験の過去問題を読ませることも必要である。
(問題を解くのではなく、文書を読みこなすのである。)

《外環教科》主環教科ができていることが前提となり、勉強の時間配分が重要となる教科

〔理科・社会〕

いずれの教科も「新演習」を使って行う。学校の進度にかなりのばらつきがあるので「新演習」を使うことで、一定のレベルを維持させながら幅広く問題を解いていく。また、わからない単元については簡潔にまとめあげる「フジタ方式」を用いて説明を行う。高校受験を控える公立生は、早い時期から過去問題を行う。いずれにしても、やはり先取り学習をすることで、学校での授業をよりわかりやすくすることを目的としている。詳細については、個々に対応せざるを得ない部分もあるため割愛する。

【注】「フジタ方式」とは、フジタオリジナルの授業のことである

以上の方法により中学課程を徹底的に先取りすることで、また、高校課程を単なる勉強ではない大学のための、また、将来の十分な予備知識として蓄え、揺るぎない実力と他を寄せつけない圧倒的な勉強量を誇示することで確実な大学進学を目指してゆく。

【注】このカリキュラムは、部活動への参加を否定するものではなく、実際には、全国レベルの大会に出場するような部活動に所属している生徒でもこなし、大願を成就させている。決して無理なカリキュラムではない。問題は、本人が「やるかやらないか、出来るのかできないのか」であって、まさに本人次第であるということは、フジタの過去の指導経験からもわかっていることである。

以上 文責 フジタ